

お札の三人と『資本論』

馬 場 宏 二

はじめに

ごく最近、偽札防止のためだそうだが、お札の人物像が変わる予定だと報じられた。そうになってしまってからではこの主題は意味がない。三人それぞれについて、別々の契機があって別々の視角から調べたことがあり、それぞれを文章化したことも一度ならずある⁽¹⁾。既述の文が基礎になるが、僅かながら新材料が手元に貯えられてもいる。研究ノートと言うよりエッセイと呼ぶ方が相応しい底の文章ながら、記しておくなら今のうちである。

『資本論』は、言うまでもなくカール・マルクスの著書の『資本論』である。そのマルクスは、もともと貧乏というより、おそらく夫人ともども家計管理がなっていないくて、暮らしの金に困ることがしょっちゅうあり、親友エンゲルスにねだったり助けてもらったりしながら『資本論』第一巻を書き上げた。その印税が、この間に吸ったタバコ代にも足りまいと嘆いたことは有名だが、ともかく、資本を論じてこの上ない著作を書きながら貨幣不足に悩んだ一生だった。

そればかりでははい。数はそう多くはないが、遠く離れた日本について、時にはよくまあここまでと感嘆させるような豊富な知識を披露している場合があるが、むろんその知識は充分体系的だったわけではないし、ジャワと日本を混同してエンゲルスに嗜められ、自分は地名の記憶が悪いなど白状したりしてもいる⁽²⁾。

カネに縁がなく、日本にも大して縁のなかったマルクスの主著『資本論』が、しかし、現在なら日本円紙幣の肖像になっている三人それぞれに少しずつ縁がある。袖擦りあう程度の縁だが、それでも他生の縁である。いささか牽強付会めくところもあるが、ともかくそれについて知るところを述べる。年齢順に並べると福沢諭吉（1834～1901）、新渡戸稲

造（1862～1933）、夏目漱石（1867～1916）となる。偶然だがこれはお札の金額の順でもある。

1. 福沢諭吉と『資本論』

三人の中で一番縁がなさそうなのが福沢諭吉である。

金儲けを奨励し自らも結構儲けた福沢が、プロレタリアの科学の書である『資本論』と縁が薄いのは当然だなどと、初めから硬いことを言ってしまうのは身も蓋もない。福沢は洋学者であり、西洋の経済学を導入し経済学教育を始めた先駆者である。その面から『資本論』との関わりがなかったか。検討する意味が多少はあるかも知れない。

とは言え、さほど関わりがなさそうなことは初めから見当がつく。福沢は蘭学を学び英学に転じた。ドイツ語の『資本論』は、気付いても敬遠したろう。同書初版は1867年9月にハンブルグで出版されている。慶応三年。この年福沢は、幕府の軍艦受取り一行に加わって二度目の渡米をしており、原書を沢山買ってきたと回想しているが、在米は5月までだから、そもそも『資本論』は手にできなかった。維新後の1869年になると、福沢屋諭吉をやり丸屋商社の設立に関わっているから、こちらの金儲けの筋で輸入しなかったかと一旦は考えられるが、およそ売れ筋ではないし、この本が日本で紹介されたのが1881年、初輸入が1887年より遅くない何時か⁽³⁾だと言うから、福沢は多分それまでには触ってもいないだろう。

おまけに『資本論』は英訳出版に手間取った。エンゲルス監修、ムーアとエーヴリング訳の英訳版⁽⁴⁾が出たのは1887年初である。福沢すでに54歳、功成り名遂げて、自称老余の半生⁽⁵⁾に入っている。よくよくのことがなければ、気付いたにしても読んだりはずまい。

福沢諭吉蔵書目録の類は完備してはいないとのことなので、自分の足で物証を探すのはやめることにした。それでも念のために、現在経済学者中福沢研究の第一人者、と筆者が勝手に決めた西川俊作氏に、わずかな交流があるのを頼りにいきなり電話を掛け、福沢が『資本論』を持っていた証拠があるか、読んだと述べた文章があるか、と伺ってみた。予想どおり、ないと思いますとのお返事である。併せて「福沢宗家寄贈洋書目録」⁽⁶⁾と、マ

ルクス・エンゲルスが寄稿した『ニュー・アメリカン・サイクロペディア』を福沢が上記渡米時に買って来た話⁽⁷⁾のコピーを送って下さったが、これはむしろ、福沢とマルクスの縁がいかにかに薄いかを示す証拠のようなものである。

それでは福沢と『資本論』は全く縁がないのか。全くなければ本稿で取り上げる理由はない。ところが、同時代人として、形成途上の『資本論』に地理的に接近したという縁だけはある。

文久元年末、幕府は神戸開港延期交渉のため竹内使節団をヨーロッパに送る。福沢はこの遣欧団に御雇い翻訳方として加わり、翌年末に帰国する。西暦では1862年になるが、一行は5月初めにはロンドンに着き、6月13日まで滞在する。ホテルはブルック・ストリートのクラリッジホテル。福沢の旅行日記『西航記』の5月14日付（西暦では6月11日）のところに、テムズトンネル、セントポール寺院の後「ブリッチュミュージウムに行く」⁽⁸⁾と記されている。それだけである。旅行メモ「西航手帳」では5月2日のページ⁽⁹⁾にMuseumとあるが、前後は意味不明で、詳しく見学したメモとは読めない。帰国後書いた『西洋事情』に蔵書80万冊とある⁽¹⁰⁾のはこの時の記憶か、後に纏めて得た知識か。いずれにせよ中を歩き回った臨場感はない⁽¹¹⁾。とすると、仮にマルクスがそこに居たとしても、顔を見たと言えない。

そもそもマルクスが当日大英博物館に来たかどうか定かでない。彼が『資本論』準備のために長い間そこへ通いつめたことは周知だから、居た可能性があるとはひとまず仮定する。ただ数年前に、妻に遺産が入ったのを機にディーン通りから郊外のグラフトン・テラスへ転居していた。大英博物館や福沢のいたクラリッジホテルから、かなり遠くなっている。おまけに南北戦争のあおりで新聞原稿収入がなくなり、貴族別荘用の建物に住みながら金に困っていた⁽¹²⁾。図書館へ行かなくなっていたかも知れない。他方、マルクスの側から福沢に興味を示した気配もない。当時のエンゲルスとの往復書簡には、日本に関わる話題としてはロシアが対馬占領を企てた騒動が地名誤読混じりで記されているだけで、日本使節団来欧の記述は全くなく、主たる話題はもっぱらアメリカの南北戦争である⁽¹³⁾。

ところで、『資本論』成立史によると、マルクスは1862年には、今日『剰余価値学説史』として刊行されている、『資本論』準備ノートを作成しており、5・6月にはリカードとロードベルトスの説を素材に絶対地代を考えていた。年末にはクーゲルマン宛に、書名を『資

本』副題を『経済学批判』とする意向を示している⁽¹⁴⁾。つまり『資本論』準備は大詰め
の段階だった。福沢が会って英語で話したとしても中味が理解できたかどうか。

こうして、福沢と『資本論』の縁は、執筆直前のマルクスと、お互いの存在に気付かぬ
ままに、ロンドンで同時に一月半ほど生きていたと言う以上にはなりそうにない。しかし
同時代性をここまで経験した日本人は滅多にいない。早い話、新渡戸稲造は誕生二ヶ月前、
夏目漱石は五年後の『資本論』刊行の年の生まれである。

2. 新渡戸稲造と『資本論』

三人の中で一番『資本論』とは縁が深いのは新渡戸である。彼は何冊か所有したし、完
読してはいないがかなり良く読んでおり、鮮やかに利用した。晩年この本と関わりを回想
しており、批評してもいる。

以下、新渡戸と『資本論』との関わりについては、これまでに得た知識を結論風に纏め
て述べる。実は情報探索記にした方が楽しい文になるのだが、既稿と多々重複し、幾分複
雑になるうえに均衡を失するほど長くなる。新渡戸自身の時間の流れに即して編年史的に
整理しておく。

まず、新渡戸が『資本論』なる書物を耳にしたのは、おそらくアメリカ留学中である。
1884年10月から、ジョンズ・ホプキンス大学に在籍し、そこでリチャード・イーリから、
マルクスの名とマルクス説に対するイーリの見解を教えられた⁽¹⁵⁾。新渡戸23・4歳の頃
である。『資本論』の文面に接したかどうか、可能性皆無ではないが今のところ確認出来
ない。

イーリは、マルクス主義者ではないが本格的な社会主義研究者である⁽¹⁶⁾。当時イギリ
スでハインドマンが、自ら主催する雑誌“Today”に、『資本論』冒頭部分の英訳を連載
していた⁽¹⁷⁾。イーリがこの雑誌を取り寄せ、学生達にも読ませていたとすれば、新渡戸
はこの時既に『資本論』冒頭部分の文面に触れていたことになるが、回想でイーリからマ
ルクス説を学んだとは語っていても『資本論』とも読んだとも述べていない⁽¹⁸⁾から、こ
こでは読んでいなかった可能性の方が高い。読んでいたとしても連載の途中でドイツへ出
発しているから、訳文全部は目にできなかったろう。因にこの英訳は、エンゲルス監修の

英訳『資本論』⁽¹⁹⁾より早く現れ始めてエンゲルスを焦らせたが、結局完訳にならずに終わり、後に『カール・マルクスの価値理論』⁽²⁰⁾という普及本に纏められた。新渡戸は、そうした経緯を知ってか知らずか、この本も持っていた⁽²¹⁾。

つぎに、回想によれば、新渡戸がシュモラーに、社会主義文献としてマルクスとロードベルトスを教示され、難しく困ったが、シュモラーがマルクスの歴史的部分には名句があると言ひ、自分でも面白いと思った⁽²²⁾。これは新渡戸のベルリン時代だから、1888年になる。買ったのは無論ドイツ語版。どこまで読んだかは当面判らない。と言うのは、以前に述べたことだが、杉本俊朗先生から新渡戸の蔵書印のある『資本論』第二版を古書店で見たことがあるとの御教示を得ているからである。さて、その時買ったのは故大島清法政大学教授。大島の蔵書は後に中国社会科学院世界経済政治研究所に寄贈されたが、中国側は整理もしていないらしく、問い合わせにはこの版はないと答えている。と言うわけで、この時新渡戸がどこまで読んだかは全く解からない。ただ、肝心の日本純粹封建制説は読んでいなかったものと思われる。1890年にハレ大学へ『日本土地制度論』⁽²³⁾なる論文を提出して哲学博士を得ているのだが、この論文では日本の封建時代も扱っているにも関わらず、マルクスも『資本論』も出て来ないからである。

1888年に少しでも『資本論』を読んだとすれば、新渡戸は日本で最初にこの本を読んだ人物となる。同じ時期にシュモラーについたりハレ大学のコンラッドのところで学んだりした金井延が読んでいれば二人同時になるが、金井の側の資料⁽²⁴⁾からは『資本論』の気配が伝わってこない。他に早くから読んだ可能性があるの長谷川如是閑と福田徳三くらいだが、どちらも少し若すぎる。新渡戸が日本で—そしておそらく東洋で—最初に『資本論』を読んだと確定するためには、当面、中国社会科学院の学問的誠意を期待するしかない。

さて、新渡戸が纏めて読んだ痕跡があるのは、北海道大学図書館新渡戸文庫所蔵の、フンボルト社刊英訳『資本論』⁽²⁵⁾である。この文庫は、新渡戸の遺品中洋書の学術専門書を纏めて持っており、マルクスのもので他にグレイシャー社刊英訳『資本論』⁽²⁶⁾や前述の『カール・マルクスの価値の理論』もあるが、いずれにも読んだ痕跡はない。フンボルト版だけは書き込みや傍線がたくさんあり、手沢本と言って良い。特に、目次の第8編「いわゆる本源的蓄積」の文字の脇に鉛筆で○がつけられている他、その第27章「土地か

らの農村住民の収奪」の一欄外註にある「日本はその土地所有の純粹な封建的組織と、その発達した小規模耕作とをもって…忠実なヨーロッパ中世像を示す」と言う、ずっと後に日本資本主義論争のなかで有名になった一文に、ここだけは青鉛筆で、かなり目立つ×がつけられている。

これが学位論文で引用されるべくして引用されず、その代わりに新渡戸の文名を一気に高めた『武士道』で引用された文言である。同書で新渡戸は、欧米のキリスト教に代わる日本の道德の源泉は武士道であり、武士道は封建制の産物で、欧米人は封建制があったのは西欧だけだと思っているが、日本にもあったのだ、と『資本論』のこの一句を引き合いに出したのである。博覧強記を偲ばせる、戦略的にも絶妙な引用である。しかも新渡戸がこれを使ったのは、『資本論』を読んだ日本人が他にいなかったであろう時点である。因に、新渡戸がアメリカで英文『武士道』を出版したのは1899年、フンボルト版『資本論』を読んだと推測されるのは、1891年頃⁽²⁷⁾である。

その後新渡戸の著作で『資本論』が出てくのは、有名な『農業本論』の1908年増訂版の引用文献目録である。だが『資本論』はそれまでの版には出て来ない。しかも増訂版でも実際の引用はなされておらず、目録を作ったのは新渡戸本人ではなく小出満二だと言うから、この例は除外してよかろう。となると、残るは晩年の回想だけである。筆者の気付いた限りで二度ある。一つは『内観外望』中の「マルクス運動の我国に容れられぬ理由」⁽²⁸⁾、もう一つは『英文毎日』に書き続けた「編集余録」⁽²⁹⁾である。

『内観外望』は新渡戸逝去の1933年の出版だが、講演集であり、今の「マルクス運動云々」で45年前にイーリにマルクス説を教わったと述べているから、この講演は1928年頃行なわれたのであろう。イーリやシュモラーにマルクスを教えられたと述べているが、特にイーリから、マルクスは論理的に深いが現実離れしていると教えられたことを取っ掛かりにして日本のマルクス主義運動の批評に入っていく。

イーリの文章にはマルクスの現実離れなどという指摘は見当たらないが、そこはまだ議論の余地がある。「編集余録」のアメリカから送ったらしい記事に、ある学者によると「リカードの周到鋭敏な証明と比べてみると、マルクスの理論はしまりがなく要領を得ない」⁽³⁰⁾とあり、こちらは新渡戸の、経済学者としての弱点を集中的に表現している。そもそも彼は、スペンサーの説を頭から信奉して報告したら、その説に対するおまえ自身の考

えはどうかとイーリに問われて愕然としたことを回想していた⁽³¹⁾。日本の学問は丸暗記だから駄目だったのだと若い学徒に説いたのは彼自身だった。ところがその新渡戸が、マルクス理論を論難するのに、自分の言葉で語らずにアメリカの学者の権威を借りている。しかも、ここはどうやら価値論に関わるところなのだが、リカードと比べるとマルクスには、歴史叙述があるばかりか価値形態論がある。商品交換関係を人間関係の基本だと思っ込んで入るアングロ・サクソンには、価値形態論の意味は捕え難いから「しまりがな」く見えたのである。おそらく新渡戸自身もそう解したのであろう。フンボルト版『資本論』への書き込みを見ると、理論的部分には極めて少なく歴史的部分に多い。そして理論的部分としても、投下労働価値説の部分にはあっても、価値形態論の部分にはない。自ら理論体系を作ろうとしなかった新渡戸には、マルクスにおける最大の理論的貢献が、価値形態論を中心とする、商品・貨幣・資本の流通諸形態の解明だったことは、遂に解からなかった。最晩年にアメリカの学者の権威に安易に追随したのも、そのためだった。

もっとも、これは新渡戸が経済学者として無能だった事を意味するものではない。彼は30歳前に書いた学位論文の中で、「政治経済」の語源がモンクレチアンであることにさりげなく触れていた⁽³²⁾。これは今日、通常の経済学者は聞いたこともない名前である。恐るべき博識と言って良い。また彼は「編集余録」の中で大恐慌期のNIRAに触れ、コンフィデンス・セオリーと呼ぶべき景気観を垣間見せた⁽³³⁾。こうした博識と現実感覚が結合したのが、今なお現地で高く評価されている、台湾糖業の調査と意見書⁽³⁴⁾である。『資本論』のような理論体系を作るのは苦手でも、現実論には驚くべく優れた感覚を持合せていたのである。

3. 夏目漱石と『資本論』

そもそも筆者が、文献考証などと言う、それまで関心も経験もなかった事柄に関わった契機が、東北大学漱石文庫所蔵の英訳『資本論』である。1998年夏のことだったが、狩野亨吉文庫の『周礼政要』で「商会」を確かめることを主目的に東北大学図書館を訪れた。『資本論』を見るのはいわばオマケのつもりだった。ところが狩野文庫の方はマイクロ化してあったので、見るのも簡単コピーも簡単、用事はすぐ済んでしまった。他方、漱石文

庫はまだマイクロ化してなく、予め申し出た『資本論』一冊だけを別館の窓口で重々しく渡してくれる。中味は以前に聞いておいた通り、全く書き込みがないから、実は時間を持って余した。書き込みがないことを確認しただけでは、わざわざ仙台まで新幹線で来た甲斐がない。そこで漱石本、ソネンシャイン社発行の1902年刊英語版『資本論』⁽³⁵⁾表紙に刻してある既刊発行状況をメモした。これがその後の文献考証のバネになった。

身を動かすといろんな面に関心が広がる。その後まもなく、新渡戸稲造の蔵書だった『資本論』を見るために北海道大学図書館を訪れることになるが、それとは一応別に、漱石とマルクスの関係にも興味が湧いた。幸い友人平田喜彦（法政大学）氏が漱石が手紙で『資本論』かどうかは判らないがマルクスの説について書いている、と知らせてくれた。岩波文庫の『漱石書簡集』⁽³⁶⁾で見ると、1902年3月15日付け、岳父中根重一宛の、1800字ほどにもなる結構長い文である。

日英同盟が結ばれ新聞論評喧しかったが、公使の労に謝するために在英者は醵金させられ自分も5円出したに始まって、来英以来、西洋人の後追いでない著述を志して読書ノートを取っている、それにつけても帰国後語学教師などで縛られるのはいやだ、好きなことのできる金と暇が欲しいで終わるが、この中間に、マルクスが出て来る。「欧州今日文明の失敗は明らかに貧富の懸隔甚だしきに基因致し候」…「カール・マークスの所論の如きは単に純粹の理屈としても欠陥有之べくとは存候へども今日の世界にこの説の出づるは当然の事と存候」と大変な気焰である。留学足掛け三年目、前年夏に頼りにしていた池田菊苗が去り、「神経衰弱」のせいか日記⁽³⁷⁾が無くなっているが、手紙は良く書いている。父方に預けた妻鏡子には、手紙をちゃんとよこせだの子供のしつけに良くないから朝寝坊するなどの、小煩い手紙を出している頃である。

漱石文庫に残された『資本論』の表紙には、初刷から始まって Eighth, March, 1902 の文字が刻されているから、日記にはないが、漱石がこの手紙の頃、英訳『資本論』のこの第8刷を買ったことはほぼ間違いあるまい。そしてなお、別途『漱石全集』を検討して判ったところ⁽³⁸⁾では、漱石はこの手紙とは別に、ノートに Marx の文字を3回残しているが、いずれもベンジャミン・キッドの、同じ1902年に出た『西洋文明の起源』⁽³⁹⁾と関わっており、『漱石研究』⁽⁴⁰⁾によれば、漱石がキッドを読んだのはイギリス留学中だとのことだから、漱石のマルクスに対する関心が示されたのは1902年中に限られ、しかも、

岳父宛の手紙でマルクスを論じたのも、『資本論』を読んだ結果ではなく、専らキッドの受け売りだったことになりそうである。

漱石研究者でもない人間が、世に多い漱石崇拜者の言い分と全く違うことを言うので恐縮の極みだが、私には、漱石も可愛いところがあったな、と感じられてしまう。おそらく彼は、妻を預けた岳父に対して、留学の成果があったと精一杯虚勢を張って見せたのである。繰り返し書いている「金がない」にしても、先進国に来ると為替平価で見て母国より物価が高いと、経済学的には当然に過ぎないことに不満を言っている場合すらある。そしてせっかく学者として留学に出されながら、その地の大学を探ろうともしなかったのは、ただ金がなかったせいかと言う疑問も湧く。買ったばかりのマルクスを、読みもしないのにいきなり持ち出したり、ろくに知らないマルクス説⁽⁴¹⁾に対して受け売りで「欠陥」をあげつらったりしたのは、明らかに虚勢である。恩義のある義理の父に対して虚勢を張っているところが、あまりに人並みなので何とも可愛い。

ただ漱石はここで虚勢を張ったことに対して、長く引け目を感じていたのかも知れない。今年お送りした文章に対する返礼として、鈴木和雄（弘前大学）氏が、ご存知でしょうかとコピーを送って下さった服部文男『マルクス探索』⁽⁴²⁾中の「夏目漱石と『資本論』」なる文章が手掛かりになる。実はこの本があることに気付いてもいなかったのだが、見るとその趣旨は、漱石の最終作「明暗」（1916）に『資本論』らしい本が出てくる、「明暗」を執筆した当時ドイツ語版の『資本論』が日本に入荷していて漱石がそれを見たことがあっても不思議はない、と言うのである。「明暗」は近年「会社」探し⁽⁴³⁾のために読み直し、主人公津田が、「二ヶ月以上もかかってまだ読みきれない経済学の独逸書」⁽⁴⁴⁾を持っていたことには気づいていたが、迂闊にもそれが『資本論』だとは想到しなかった。

さてこれが『資本論』だったとすると、ここから、漱石がマルクスについて嘗て知ったか振りをしたことに対する悔恨が現れていると読むことが可能になる。因にこの小説には「疎外」なる文字も使われている⁽⁴⁵⁾が、この語がマルクス主義用語として流行り出すのはもっと後に福本和夫が利用してからだろうから、漱石がここでマルクス主義に転向したとは考えられない。「悔恨」はもっと一般的な意味である。漱石は得意とする英語でも『資本論』は読んでおらず、ドイツ語の原書に至っては買ってもしなかった。おそらくドイツ語はさほど得意ではなかったろう⁽⁴⁶⁾から買わなくとも当然である。こうして漱石は、中

根重一にマルクス説の欠陥に関して行きがかり上知ったか振りをして見せた後も、マルクス『資本論』は遂に全く読まなかった。だが彼の晩年頃には、マルクス説は流行になりかけていた。かつて知ったか振りをしたことに、知識人漱石は内心忸怩の思いを抱き続けていたのではなからうか。「明暗」の今の文⁽⁴⁷⁾は、彼の告白だったかも知れない。こう解すると、「漱石におけるマルクス」は、思想史の主題になるか否かはともかく、文学史の主題にはなりそうである。

むすび

お札の交替で、日本円と『資本論』の縁がめっきり細くなる。生き残るのはもともと縁の薄い福沢だけである。漱石に至っては教科書からさえ消えている。その漱石は、お金の世界は大嫌いだ、帝大講師を棒に振って希に見る高給で「朝日新聞」のお抱え文士になったから、決して貧乏ではない。新渡戸も一高校長・帝大教授として小石川に豪邸を構えた。三人の間に格差はあっても、貧富と対照できるようなものではない。ところが今度はお札に樋口一葉が入ると言う。こちらは貧困の極致である。日本社会は、貨幣の本質探究をないがしろにしながら、実社会では大きな貧富の格差を放置歓迎する、アメリカ的社会に向かって舵を切ったのだろうか。

註

(1) 本稿に関わる既成の拙稿は以下のごとくである。

福沢諭吉：－

*「福沢諭吉の会社論」大東文化大学『経済論集』73号、1998年10月 のち馬場宏二『会社という言葉』、2002年大東文化大学経営研究所 第二章

*「福沢諭吉における“会社”」『福沢手帖』第110号、2001年9月

新渡戸稲造：－

*『『武士道』と『資本論』』『大東文化』1996年10月15日

*「新渡戸稲造の『資本論』」大東文化大学『経済論集』74号、1999年5月

*「いくつかの『資本論』」大東文化大学『経済論集』76号、2000年1月

*「新渡戸稲造と『資本論』」『新渡戸稲造研究』第10号、2001年9月

夏目漱石：－

*『『国富論』から三題』大東文化大学『経済論集』78号、2001年3月

*「文学と会社の間」大東文化大学『経営論集』3号、2002年1月 のち馬場宏二前掲『会社という

言葉』

*「続・『国富論』から三題」大東文化大学経済研究所『研究報告』第15号、2002年3月

- (2) マルクス＝エンゲルス往復書簡1962年3月、『マルクス＝エンゲルス全集』大月書店、第30巻、178～180ページ
- (3) 鈴木鴻一郎『『資本論』と日本』1959年弘文堂、79ページ
- (4) *Capital A critical Analysis of capitalist production by Karl Marx translated from the third German edition by Samuel Moore and Edward Aveling and edited by Frederick Engels, London Swan Sonnenschein, & co., ltd, 1887, two vols.*
- (5) 『福翁自伝』岩波文庫
- (6) 『近代日本研究』第8巻(1991年)所載
- (7) 太田臨一郎『『ニュー・アメリカン・サイクロペディア』をめぐって』『福沢手帖』第7号
- (8) 『福沢諭吉全集第19巻』1962年岩波書店、34ページ
- (9) 同上書、122ページ
- (10) 『西洋事情』中「文庫」に、主要館の蔵書数がペテルスブルグ90万、パリ150万、ロンドン80万とある(『福沢諭吉選集第1巻』120ページ)
- (11) 山口一夫『福沢諭吉の西航巡歴』1980年福沢諭吉協会は、福沢のヨーロッパ紀行を細かく追跡していてこの際極めて有用だが、残念ながら大英博物館には触れていない。
- (12) 参照、A・ブリッグズ、小林健人訳『マルクス・イン・ロンドン』1983年、社会思想社。当時のマルクスの消息に関する一般的知識とともに、この文献と詳しい地図のコピーを授けてくれた、友人福留久大氏(九州大学)に感謝する。
- (13) 前掲『マルクス＝エンゲルス全集第30巻』
- (14) 『資本論辞典』1961年青木書店中の『『資本論』成立史』と『『資本論』年譜』の該当箇所を見よ。
- (15) 新渡戸稲造『内観外望』1933年『新渡戸稲造全集第6巻』1969年教文館、235ページ以下。
- (16) 参照、Richard Eli, *FRENCH AND GERMAN SOCIALISM IN MODERN TIMES*, London, Trubner & co. 1884. 簡潔な概観だが、公正と不偏頗を旨とし、16章中1章をマルクスに割いている。好意的で理論的には高く評価した、均整のとれた紹介である。新渡戸が回想で紹介していた、マルクスの現実離れといった解釈は、およそ出てきそうにない。因に同書は杉本俊朗先生から拝借したもので、もともとの所有者阪谷芳郎の蔵書印が押してある。
- (17) 東京大学総合図書館にある同誌のマイクロフィルムで見ると、1885年9月号から始まって頭から訳載され、1889年5月号まで断続的ながら連載されて、現行版だと第8章末尾にある工場法にまで及んでいる。訳者はJ・ブロードハウスとあるが、ハインドマン自身だという。原文の章節の区切りや一号ごとの訳文の長短にこだわらず、出来た分だけ掲載したようである。
- (18) 新渡戸『内観外望』、前掲『新渡戸稲造全集第6巻』235ページ
- (19) 上掲註(4)
- (20) KARL MARX's *Theory of Value* complete, forming the First nine Chapters of "CAPITAL", London William Reeves. この本は訳者名も出版年も底本も書いてないが、ときどき訳註にJ. B. とあるから、ジョン・ブロードハウスつまりハイドマンが"Today"に訳載したものであろう。但し最終章は第9章、内容的には現行版の第7章「剰余価値率」である。因にこれも杉本俊朗先生から拝借したもののだが、同書の第4刷で、新渡戸の所蔵本と同じ版である。
- (21) 筆者は新渡戸文庫ではこの本を見出せなかった(参照、前掲馬場「新渡戸稲造の『資本論』」28ページ)

- ジ)。やはり視野狭窄のせいで、その後岡部洋実氏が見付け出して冒頭部分のコピーを送ってくれた。
- (22) 『内観外望』『新渡戸稲造全集第6巻』236 ページ
- (23) Über den Japanischen Grundbesitz dessen Verteilung und Landwirtschaftliche Verwertung
- (24) 河合栄治郎『金井延 人と業績』1939年日本評論社
- (25) *CAPITAL* Critical Analysis of Capitalist Production by KARL MARX Translated from the third german edition, by Samuel Moore and Edward Aveling and edited by Frederick Engels, New York The HUMBOLDT PUBLISHER. 因にこの版はエンゲルスによれば海賊版であり、そのせいか出版年が記入してない。ただ、1890年秋に四分冊で出版されており、分冊本完行直後に合冊本になる予定であることが分冊の自社広告から解かるから、1890年暮れか91年初頭に世に出たものと思われる。
- (26) *CAPITAL* (底本・著者・訳者の表示はソンネンシャイン版、フンボルト版と同じ)、WILLIAM GLAISHER, limited, London, 1918.
- (27) 新渡戸は1890年にドイツで学位を得て、婚約者メリーのいるアメリカへ戻り、91年初に結婚してのち、札幌へ農学校教授として着任する。手沢本の蔵書印の一方が、二重丸で内丸の中に SAPPORO, 外丸と内丸の間に *NITOBE *MARY *INAZOU とある、新婚気分丸出しのものであるから、読み始めたのは三月の札幌着任直後ではないかと推測出来る。
- (28) 前掲『新渡戸稲造全集第6巻』
- (29) 『新渡戸稲造全集第20巻』
- (30) 同上書 572 ページ
- (31) 『内観外望』『新渡戸稲造全集第6巻』241~3 ページ
- (32) 『新渡戸稲造全集第2巻』815 ページ『第11巻』16 ページ
- (33) 『新渡戸稲造全集第20巻』720 ページ
- (34) 「糖業改良意見書」「台湾における糖業奨励の成果と将来」『新渡戸稲造全集第4巻』所収
- (35) タイトルは註(4)の文献と同じ
- (36) 三好行雄編『漱石書簡集』、手紙の主要部分は同じ岩波文庫の三好行雄編『漱石文明論集』にも含まれる。
- (37) 平岡敏夫編、岩波文庫『漱石日記』、66 ページ
- (38) 参照、前掲馬場「続『国富論』から三題」89、95 ページ
- (39) Benjamin Kidd, *The Principles of western civilization*, London, Macmillan, 1902、東北大学漱石文庫所蔵
- (40) 『漱石研究』第4号1995年、179 ページ
- (41) 漱石はマルクス理解を専らキッドに拠りながら、なおキッドを誤読したのか、マルクスの宗教観を誤解したメモを残している。上掲馬場89~90 ページ
- (42) 服部文男『マルクス探索』1999年 新日本出版社
- (43) 馬場、前掲「文学と会社の間」
- (44) 夏目漱石作『明暗』岩波文庫、110 ページ
- (45) 同上書、444 ページ
- (46) ドイツ語の文学を読みかけて散歩に出てしまい、小宮豊隆に不熱心だと叱られている。前掲岩波文庫『漱石日記』86 ページ
- (47) 『明暗』の初めのころに、上記の独逸経済書について、津田が結婚後三、四カ月目に読み始めて二カ

月以上経っても三分の二にも達せず、「前途遼遠という気と共に、面目ないという心持ちがどこからか出てきて、意地悪く彼の自尊心を擽った」（同上 18 ページ）とある。作者の内心忸怩を主人公に仮託したごとくである。

2002年8月18日～8月27日